

第4回高等教育推進センターSD講演会

日 時：2014年12月11日(木) 17:00~18:30

場 所：関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス 本部棟会議室5

開 会 の 辞

平 林 孝 裕 (関西学院大学 高等教育推進センター長)

本日は、第4回のSD講演会にお集まりいただきまして、大変感謝しております。今回は、校友の組織化ということで、友金孝夫先生をお迎えしております。

私たち大学を取り巻く環境は今日、大変厳しいものとなっています。そういった中で、大学が社会との関係について、今まで以上に真剣に考えることが重要な課題の一つとされています。厳しくも、また暖かくも、私たちに顔を向けてくれている最初の社会が、同窓生、卒業生というステークホルダーです。これからは、同窓生・卒業生とのいっそう緊密な関係をもちつつ、大学を運営していく必要があるということです。

本学も、2009年からの新基本構想、新中期計画の中で、校友会活動について、同窓会との連携を強化する事業を実施しておりますが、既に5年が経過しております。そのような中で、私たちの取り組みを検証しつつ、今後につなげていくために、このような機会を計画いたしました。

現在、友金様は早稲田大学総長室校友課長と早稲田大学校友会事務局長を務められております。同窓会とのつながりやこれからの発展について、早稲田大学での取り組みに学び、本学の今後に役立てていきたいと考えております。ステークホルダーとしての卒業生にどう対処していくべきか、実際の現場に直面した立場からお話をいただき、私たちの心構えや姿勢を見詰め直す機会とさせていただきたいと思っております。

講演「早稲田大学の校友業務について」

友 金 孝 夫（早稲田大学総長室校友課長・校友会事務局長）

ただいまご紹介いただきました友金と申します。大学では総長室校友課長の業務を行っておりまして、校友会では事務局長の役目を担っております。この2つの役職は兼務ではなく、異なる組織になりますので、名刺には併記しております。

本日はお招きいただきまして、本当にありがとうございます。関西学院大学には3年前だと思えますが、私立大学15大学の校友関連業務の担当者が集まる機会があり、会場が関西学院会館でした。その時に、このようなすばらしい会館をお持ちの大学があるのだと感激し、今日、正門からキャンパス全体を見渡しますと、これほど素敵なキャンパスをお持ちの大学は、なかなかないと非常に感動しております。

最初に、私の自己紹介をさせて頂きたいと思います。私は、兵庫県立宝塚高等学校出身でして、一浪して早稲田大学に入学し、そこで学生時代を送りましてから、早稲田大学の職員として就職をしました。本学では、例外はありますが通常ですと新入職員は最初4年間、最初に配属された部署で経験を積んだのち、概ね6年で異動します。最初の部署は演劇博物館、その後政治経済学部事務室の庶務係、入試係を担当しまして、理工学総合研究センター、戸山総合事務センター（文学部等の事務所）に配属されました。ちょうど新しい学部をつくる最中で、文化構想学部の立ち上げ業務を行ないました。この段階で管理職になり、戸山総合事務センターで総務入試担当課長を務めて、2011年6月から総長室の校友課に配属されて3年半が経過しました。まったく校友業務とは関わりがなかったそういった業務経歴の者が本日お話をさせていただきます。

1. 総長室校友課の成り立ち

通常、校友会の話を中心にすることが多いですが、大学がいかに校友と接触する経路を持っているかということの切り口に、早稲田大学の取り組みを紹介していこうと考えております。実のところを言いますと、校友課だけが校友にアプローチしているわけではなく、色々な部署が校友にアプローチをかけております。もちろん何らかの形で校友課が絡むような仕組みになってはいますが、そのあたりもお話できればと思っております。まず、校友課の成り立ちと申しますか、今回良い機会をいただきましたので、校友課はどういった事務組織の編成の後に、現在に至っているのか調べてみました。

調べてみますと、1955年に校友部校友課という部署がありました。業務は今とそれほど変わりませんが、校友との連絡調整や地方における学術講演などを行なっていました。この学術講演は、後ほどお話する地域交流フォーラムに継承されています。また、これは今の総長室募金課が取り扱っておりますが、寄付金に関する事項も行なっておりました。少し驚きましたのが、校

友会で発行している「早稲田学報」の編集を大学の校友課で行っていたことです。お手元にお配りしている「早稲田学報」ですが、これについても後ほど、触れたいと思います。

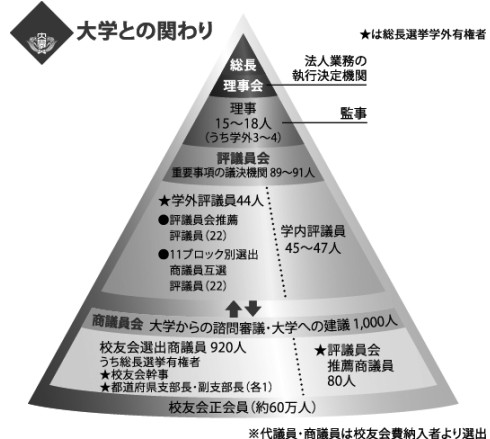
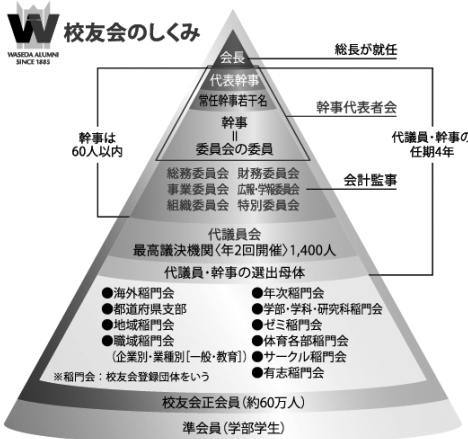
その後、1965年2月に校友部は廃止され、総長室が設置されて、秘書課、校友課、企画調査係、校史資料係が並置されました。そして、校友課の使命が終えたという理解があったようで、1967年5月に校友課が廃止され、校友との連絡調整等は庶務部庶務課に、「早稲田学報」の編集は広報課に移管されました。一番大きな組織変更が1993年4月です。冒頭に申し上げましたとおり、早稲田大学と早稲田大学校友会は全く別組織でしたが、校友会事務局を大学の組織に編入しました。理由は、卒業生の増加に伴い、校友に関する情報の整備と校友組織を強固にするためでした。校友会の校友会員資格は、正規の卒業生は自動的に校友会員になる仕組みになっており、1万人ほどが卒業しておりますから、毎年1万人が校友会員になっていました。その後、UR（ユニバーシティー・リレーション）センターを設置して、校友担当、資金担当、講演会担当を並置し、その後、2007年の創立125周年に記念募金を実施する受入体制を整えるため、現行の形になったのは1996年になります。総長室で、秘書課、募金課、校友課を並置しました。そして私のような経歴の者も配属されるようになりました。

2. 校友会について

次に、校友会の説明をしたいと思います。まず、早稲田大学校友会は早い段階から設立して、早稲田大学の前身である東京専門学校は、1882年10月21日が創立記念日ですが、その3年後の1885年12月13日に、東京専門学校校友会として組織されています。校友会の目的として、校友会規則から3つ抜粋されており、「会員相互の親睦を深めること」、「早稲田大学との密な関係を維持、発展させること」、「早稲田大学の事業を援助すること」とあり、1885年12月13日の設立総会のときにつくった規約にこういった言葉がそのまま残っております。

校友会の会長は早稲田大学総長になっています。大学の総長、すなわち理事長兼学長になりますが、校友会の会長も兼ねております。なお、校友会の会員資格は、大学の正規の卒業生になります。あと、教職員校友という、早稲田大学を卒業していなくとも、専任の教員あるいは職員に就任した場合に、自動的に校友資格が付与される規則もあります。次に推薦校友は、早稲田大学を途中で退学したけれども、稲門会という校友会の活動団体から推薦があった場合に、推薦校友になるという制度もあります。また、名誉博士は大学が敬意を持って受けていただく称号ですので、自動的に校友になっていただいています。在学生につきましては、準会員の扱いにしております。校友会の規模は、データベース上になりますが、60万人になっています。データベース上と申し上げましたのは、校友会のデータで一番入手しづらいのが物故者情報で、どこの大学の校友会も会員が何十万人もの規模になっている大学は、同じ悩みを抱えておられると思います。

幹事は60名以内とありますが、この幹事で基本的に校友会本部の運営を全て行なっています。60名の幹事の代表が代表幹事、そのもとに常任幹事が5名おりまして、常任幹事が総務委員会、事業委員会、組織委員会、財務委員会、広報・学報委員会の5つの常設委員会の委員長をそれぞれ務めており、毎月1回程度会議を行ないながら運営しています。なお、この代表幹事や常任幹事の方々はボランティアになります。常設委員会で審議した案件を、代議員に全国から参集してもらい、年2回開催する代議員会に付議して校友会を運営しています。代議員は定員1,400名で



都道府県の支部や各種稲門会から選出されています。

校友会と大学との関わりは、非常に重要です。大学には総長がいて、理事会がありまして、評議員会は理事会の最高の諮問機関になっています。評議員会の学外評議員が44名いまして、これは大学の教職員はなれませんから、学外から選出されます。この44名のうちの半分は商議員の中から選挙で選びます。この商議員は1,000名のうち920名を校友会が母体として選出することになっています。大学の基礎をこういった商議員や評議員の方々が、固めるように構成されており、その選出母体が校友会になっていることは校友会が大学の基礎を支えているという大きな意味を持っております。

校友会の活動拠点であります稲門会として、現在、約1,400の登録があります。また、各都道府県に全て支部があり、47都道府県、東京都だけ23区支部と三多摩支部に分かれていますので、合計48の支部が全国にあります。校友会は、各支部の支部総会に毎年参加して、この48支部を回り、総長も交えて懇親を深めています。その際に、校友会の事務局も同行しています。同行して何をやっているのかということに関連しますので、次に地域コーディネーター制度をご紹介します。

3. 地域コーディネーター制度について

地域コーディネーター制度も変遷がありました。1998年に校友連携強化員制度が発足し、この段階でのメンバーは管理職も一般職の職員も混じった状態で構成していました。選出は地方出身の管理職や一般職の職員を指名して校友連携強化員になってもらい、全国の支部総会を回ってもらいました。ただ、支部総会が開催されますのは土日になりますので、振替休暇等の問題がいろいろ出てきたため、管理職のみで実施しようと仕切り直したのが、2003年の地域コーディネーター制度になります。この段階では、全ての管理職がなっているわけではなくて、何となく彼ならできそうだとか、彼は〇〇県出身だから適任だろうといった一本釣りのところもありました。

創立125周年が2007年にありまして、私がちょうど管理職になったのが2006年でした。管理職になってすぐに、地域コーディネーターになりました。ただ当時は校友会の存在もしらなかつた

のに説明も何もない当時の制度に対して、非常に不満がありました。管理職になったから地域コーディネーターになって、マニュアルも整っていないのに、地域に行って、校友と懇親を深めてこいというだけでは機能しないだろうと、反省会などでいろいろ意見を言いました。2011年に異動で、私が校友課長に就任しましたので、地域コーディネーター制度を改めました。どのように改めたかという、管理職全員に地域コーディネーターになってもらいました。この変更は、2007年に記念事業の募金をやった時の反省が大いに込められております。それは募金が必要な時だけ顔を出しても、校友は都合よく利用されているようにしか感じないという反省です。毎年お会いして、懇親を深めて、顔を見知っている状態で、ずっとつながっている状態を保持しなければなりません。どのぐらい地域コーディネーターが各地を回っているかという、48の支部総会に出席し、東京の23区支部と三多摩支部、神奈川県支部、埼玉県支部、千葉県支部では支部傘下の稲門会単位の総会にも出かけています。他には職域として企業別の稲門会もありますので、色々な企業の職域稲門会で、地域コーディネーターと役職者である総長、理事等が参加して懇親を深めるということをやっています。そうすると、年間300ぐらいを調整することになります。地域コーディネーターである管理職172名で対応していると、一人年に2、3回ぐらいで何とかなるという形です。

地域コーディネーターの役割としては、まず、各支部や稲門会に参加して、大学の現状を伝えるということをやっています。例えば、入試の情報や就職状況、最近の学生気質の具合や新しい校舎ができました等、最新の情報を発信してお届けしています。また、各支部や稲門会の色々な意見・要望をお聞きする良い機会としています。

次に、地方学生の会の活動の支援をしています。地方学生の会は、県人会のようなものですが、地方出身の学生が集まって、公認のサークルをつくっている団体です。地域ごとにある地方学生の会をまとめているのは全国早稲田学生会連盟（全早連）という学生たちだけで運営している組織です。地方学生の会が、各支部と連絡をとりたいたいに地域コーディネーターが橋渡しをすることや、地方学生の会がまだ設立してないところについては、地域コーディネーターが会長になって設立する等の支援を行なっています。

地区別商議員懇談会は、校友会のところで商議員のご説明をしましたが、商議員の会合を年間2回ほど大学本部で行っています。商議員の方は、大勢いらっしゃるので、総長や理事と膝を交えた会議はできませんので、支部総会に行った段階で、商議員あるいは校友会の代議員という役職を持っていらっしゃる方と集まって、懇談をします。それが地区別商議員懇談会で、この会の司会や運営を地域コーディネーターが行なっております。また、各県支部単位でなく、九州ブロックや四国ブロックといったブロック単位の活動も支援していこうと、ブロックの組織化にも力を入れていれています。

そして最後に、地域交流フォーラムの運営協力を行ないます。この地域交流フォーラムがどういうものか、次にご説明したいと思います。

4. 地域交流フォーラムについて

この業務は教務部が行なっておりまして、1都3県以外の全ての道府県で実施しております。歴史は古くて、1890年代に、早稲田大学に当時おられた家永豊吉先生というアメリカでPh.D.を

取得された方が、紀要の中に、アメリカの大学では、各地を回って、大学教育の普及を講演しているという報告をされていまして、当時の東京専門学校でも、ぜひやるべきだということで地方巡回講話が始まったのがきっかけです。この時期、明治大学等ほかの専門学校も同様にやっていたようですが、体系だって長く続いたのは本学だけだということで、非常に重くこの活動を捉えております。地域交流フォーラムはこの地方巡回講話の流れを汲む取組みです。

教学や就職に関する説明会や、父母の懇談会、また個別の面談を行なっていて、総長、理事の講演と各学部の教員による講演も行なっております。教学に関する説明会は、各学部の事務長が担当し、就職に関する説明会は、学生部の管理職で担当しています。父母懇談会でお集まりいただいて、懇談をするのですが、そこで一般職が仲介をして、父母同士で話が盛り上がるように、話題を振るなどしています。こういった機会はなかなかないので、大変良い経験を積むことになります。

先ほどお話しした、地方学生の会の学生にも応援願って、その学生たちに声をかけて、支部総会と地域フォーラムで、父母の前で自分たちの学生生活を話してもらうようなこともしています。

個別相談会は、事前に在学生の父母を対象に、例えば教学や成績のアンケートを取って、学業成績や今後の就職の相談、入試の相談などを行ないます。在学生のご父母に対して地方に向いての細かいケアは好評です。

時間は正午ぐらいから開始になりまして、地区別の商議員懇談会を、昼食を取りながら1時間半やって、各支部総会を行ないます。その後、地域交流フォーラムの講演会や懇親会があります。終わると午後7時か8時ころになっています。懇親会の締めには校歌は必ず歌うのが、本学の校風でして、手前みそなんですけど、いい校歌なので、みんな喜んで歌います。校歌を歌わないと終われません。

地域コーディネーターには、懇親会までつき合うようお願いしています。お酒は飲めなくてもいることはできるので、懇親会まで行って校友と懇親を深めないとなんのためにやっているかわかりません。最後までつき合ってもらうように依頼しています。

大学職員は、あまり人前で話す機会がありませんが、懇親会の席上では地域コーディネーターが挨拶することになっています。大体100名前後、大きい支部ですと数百名の参加者の場合もあります。大先輩たちが多く参加する会ですので、きちんと用意してしゃべらなければなりません。社会でご活躍の方々は挨拶を重んじられる方が多いので、いいスピーチすると、さっきのおもしろい話だったねと言って、名刺交換をしてくださります。つくづく挨拶は大事です。地区別商議員懇談会、支部総会、地域交流フォーラムそして懇親会と続けて行きますと大変長丁場になりますが、この取組みを各県で毎年1回やっているのは、大きな意味を持っているのではないかと考えています。

5. Hello! WASEDA プロジェクトについて

大学のインフォメーションを発信する対象が、高校生では遅いので、小学校、中学生からすべきではないかという議論がありまして、その課題への取組みが「Hello! WASEDA プロジェクト」です。

これは研修型のプロジェクトで、大学の公認として一般職だけで運営しています。一般職から公募して、校友の人たちとイベントを実施するわけです。管轄は校友課ですが、管理職はほとんど手出しをせずに、プロジェクトメンバーたちだけで校友と実施内容について調整して企画をつくっています。管理職が現地に行くのもほぼ本番のみで、やることといえば、お世話になった校友に挨拶をするくらいにしています。

イベントの種類も色々ありまして、講演会であれば、大学で著名な人を講師として紹介して、参加者を集めるのは支部でやってもらいます。参加を呼びかける対象は校友会で活動している校友だけでなく、広く、その土地にいる早稲田の校友に声をかけます。また開催する県だけではなくて、周りの県にも広げる場合もあります。

講演会であれば、卒業した若手の校友が対象になりますが、参加型イベントになりますと、小さいお子様や小学校、中学校という子どもたちも参加するようなものを開催しています。今年は本学のサッカー部が京都に出張しまして、京都の子供たちを集めてサッカー教室を開催しました。その後、Jリーガーの方が校友でいらしたので、講演会をやっていただきました。また、名古屋では、「モヤモヤさまぁーず」という番組のプロデューサーの方が校友でしたので、講演をしてもらいました。講演会は若手の校友が集まるということで、そこから結婚に至ったカップルが2組いると聞いているので、婚活ではないですけども、成功している例であります。

以下の図は、「Hello! WASEDA プロジェクト」を紹介するにあたって、コンパクトにまとめたリーフレットです。右の端にイベントの内容が簡単に記されていますけれども、全て若手の職員が自分たちで考えて、企画をして、各自の校友と連絡を取って行なうということで、おもしろい取り組みだなと思っています。

課題としては、こういう営業マインドが必要なプロジェクトに参加する若手職員は少々偏りが

元気な Hello! がみんなをつなげる!

Hello! WASEDA プロジェクトとは?

2009 年に発足した早稲田大学公認のプロジェクトであり、早稲田大学校友会支部と連携(共催)し、全国各地でイベントを実施しています。2010 年には、校友対象に追加し、小・中・高校生対象に大規模と連携でイベントを実施し、今後も開催地域を拡大しようと考えています。

校友対象のイベントは、地域在住の若手校友の発案、大学の最新情報提供、校友会支部活動のサポート、本学教員による講師選定等、地域や校友会支部の活性化に繋がるイベントを実施したいと考えています。

小・中・高校生対象のイベントは、本学教育プログラム体験、早稲田スポーツの体験、在学生との交流を通じて、本学の魅力を知ってもらう機会を提供しています。

校友会支部が大学が、一緒にイベントを成功させることを目的とし、特に若手校友が中心となって企画・実施してイベントを開催していきます。イベント実施にあたってのノウハウの提供やサポートを行っています。

プロジェクト実施例

【講演会型イベント】

告知 2010 『山を動かすリーダーシップ』～「論理」で人は動かさない～
参加者：154名(対象：若手校友)
共催：名古屋専門学校、愛知富栄支部

告知 2009 『ワセオ(オ)・ワセ女(ジョ)のための恋愛講座』～恋愛関係上員のヒント～
参加者：101名(対象：若手校友)
共催：名古屋専門学校、愛知富栄支部

大観 2009 『夢をカタチに!』Jリーガーから弁護士へ～
参加者：400名(対象：小・中学生)
共催：早稲田中学校、高等学校、大塚早稲田倶楽部

【実践型イベント】

広島 2010 『エンジョイウィング ～自分流お好み焼きを作ってみよう!～』
参加者：40名(対象：校友)
共催：広島専門学校、広島支部

【在学生参加型・交流型イベント】

大観 2010 ハロワテラップ (大人やランゲージアクター)して、めんどうな若手学生の大変な経験やワケを、私たちが学生の側面から「ワケ」を
参加者：700名(対象：中・高校生)
共催：早稲田中学校、高等学校、大塚早稲田倶楽部

後援 2010 環境保全活動より自然・文化体験等の地域交流プログラム
参加者：200名(対象：地域在住の方)
共催：高専長岡、農業技術へのインターンシップ参加者(3名(対象：本学在学生))

【小・中・高校生参加型イベント】

大観 2009 ワセダサッカーにチャレンジ
参加者：100名(対象：小・中学生)
共催：早稲田中学校、高等学校、大塚早稲田倶楽部

後援 2010 本学の人気科目(文芸、美術・音楽、数学)およびその講義体験
参加者：70名(対象：中・高校生)
共催：津田中学校

WASEDA University

ちですので、満遍なく学内全部から一般職の若手が集まってくれて、運営できるプロジェクトにならないかと考えています。まだ伸びしろといえますか、効果がより波及的に期待できるようなプロジェクトであると思っていますので、継続して取り組みたいと思っています。

6. Waseda-net システムについて

今回はシステムの面で、校友に対するアプローチがどうなっているかということをお話ししたいと思います。このシステムは、情報企画部情報企画課で取り扱っております。

インターネットを活用した学生・教職員向けの情報提供は1998年頃から始まっていましたが、そのころはまだ実験的な側面も強く、一部のサービスのみが提供されている状況でした。また、メールシステムについても、大学独自でサービスを提供しており、学生・教職員の一部が利用しているという状況でした。2002年に NEC が提供する Big lobe のシステムをベースとして学生・教職員全員を対象としたメールサービスの提供が開始されるとともに、2003年からは校友も含めてサービスが提供されるようになりました。ご存知のとおり、1995年頃からインターネット環境が激変しました。それ以前は、どの事務室も1人1台のパソコンはなく、職場に1台ぐらいで、しかも、5インチぐらいのフロッピーディスクが、ガコンガコンと音をたてていた時代だったと思いますが、そこから、あっという間に1人1台が当たり前の環境になりました。

ここでのポイントは、生涯アドレスを利用したサービス基盤の実現で、在学生に付与していたメールアドレス (ID を兼ねる) が、そのまま校友になっても使えるという点です。在学時のものを校友になっても使える生涯アドレスサービスは他大学ではあまりないようです。学生に付与していたアドレスは校友になった段階で、転送用のアドレスになりますが、自分で転送設定をしてもらった上で、アドレス自体はそのまま活用できるようにしています。

そして、学生・教職員が利用しているポータルシステムである Waseda-net Portal に校友もログインでき、さまざまなサービスや情報提供が行われています。このサービスも2002年度から導入し、当初は校友に対して大学からの情報配信に対する許諾を取っていなかったのですが、2006年3月卒業生からは卒業時に許諾をとることで、メールの一斉送信ができるようになっていきます。

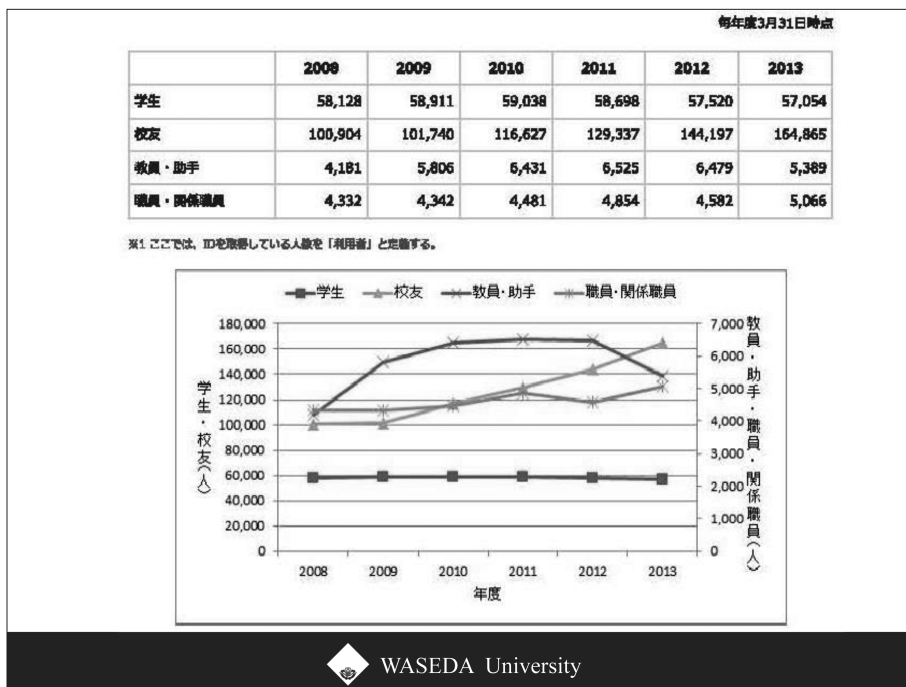
校友会は、卒業年次で組織する稲門会がありまして、年次稲門会と呼んでいます。地域の稲門会ですと必ず地域の重鎮がいて、最初は雑巾がけから始めないと活動もなかなか中心になれないみたいなどころがありますが、年次は立場が横並びなので、年次稲門会に加入してすぐ、活発な活動をされている方も多くいらっしゃるようで、元気のある年次稲門会がたくさんあります。例えば、2006年次以降であれば、年次の稲門会に入りませんかみたいな広報をする時には、このアドレスを利用します。転送設定ですが、大体7割ぐらいは転送設定をかけているということです。1万人卒業していて7割、7,000人とそれなりの数になりますので、メールベースにした広報活動ができるのではないかと、潜在的にポテンシャルがあることを考えると、これからどんどん活用していかなければいけないと思っています。校友会は先ほど申し上げました年次単位の発信をしていますけれども、大学から一斉にアドレスを持っている卒業生に対して、何らかのインフォメーションをすることは、まだ一度もしていません。大学からの案内が不要と卒業生から連絡はあった場合に送らないようにするシステムがまだ整備されていないからです。一斉送信は、

本当にいろんな波及を生みますので、慎重に進めています。ただ、校友課としては、このシステムが導入されたお蔭で、今後色々な広報活動ができると可能性を感じています。

利用者数は、2013年では在学生・教職員・校友を含めて23万2,374人（校友は16万4,865人）と、なかなかの数の登録者がいます。この Waseda-net Portal にログインしたときに享受できるサービスは、ウェブサイトのリンク先に飛ぶだけのものも多いのですが、校友会支部や稲門会の検索ができることや、校友会で WELBOX という福利厚生システムと契約を結んでおりまして、そこにログインできることもしています。後ほどご紹介する早稲田カードの協力店の検索も可能になっております。

その他の特徴としては、キャリア支援があります。大学で就職活動を支援しているキャリアセンターが、校友向けの求人情報を発信しているページにリンクすることもできております。また、校友検索・メッセージ送信機能があります。これは Waseda-net Portal にマイページのようなところがありまして、そこで住所登録の変更や現時点の就職先を入力することができます。校友検索システムで自分の情報を公開して、メッセージの送受信を許可すると、メールアドレスや連絡先などを知らなくても、卒業時の所属や名前を検索して、お互いが連絡を取り合うこともできます。2006年以前の卒業生は、自分で ID を取得している率が非常に低いので利用は限られますが校友の住所を教えてほしい、連絡をとりたいという要望に対応しています。

そのほかに、校友向けのメールアドレスは転送のみになっているのでメール自体が使いづらい（本学から付与されたメールアドレスでメールが送信できない）という要望がありましたので、Yahoo! のアカデミックエディションと契約をして、セカンドメールというサービスを提供しています。こういったメールシステムでも校友とつながりを保持していることや、校友と連絡がとれる方法を持っているかどうかというのが、校友関連業務については一番大きなところにあるの



で、我々としては大きな武器を保持しているなどと思います。また、年数を重ねれば重ねるほど登録者数が増えていきますから、早い段階から導入していてよかったとつくづく感じております。

7. 早稲田カード事業について

早稲田カードは大学提携カードでして、この事業は校友課が主体になっている大学事業です。早稲田大学とカード会社、校友会の3者の契約で成立しております。なぜ3者契約かといいますと、早稲田大学校友会員資格を持っている人しか保持できないカードになっているからです。契約しているカード会社は5社で、カードの種類は、Studentカード、Alumniカード、Parentsカードです。Studentカードは学生時代に持てるカードで、Alumniカードが校友になった段階で持てるカードです。ゴールドカード、プラチナカードも用意しています。Parentsカードは校友あるいは在学生のご父母が入会できるカードになっています。

Alumniカード・Parentsカードは、カードのポイントとは別に使った金額の0.5%が大学に還元されることになっておりまして、毎年の還元金が約8,000万円になります。早稲田カードの発足が1989年なので、今年で25周年を迎えますが、その累計の還元金が約16億円になっています。この金額は全て奨学金に充当しております。発行枚数は本人カード会員が約6万枚です。本人会員の配偶者の方が入れる家族会員カードが約7,000枚、Studentカードが約1万8,000枚で、合計で8万5,000枚ぐらいの規模で運営をしています。

Studentカードは、カードの還元金はないかわりに、カードの年会費は無料です。これは大学生協と手を組んで実施しておりまして、大学生協の組合員証と一体型のカードを発行しています。大学生協組合員へは、どこの大学も9割以上は加入していると思います。本学も95%ぐらい入っていますが、一体型のカードを持つ学生は40%ぐらいです。まだまだ加入を促進する余地があります。実際には卒業後にAlumniカードを校友に周知するのは難しいので、Studentカードからの自動切り替えでAlumniカード加入者数を増やす方法に力を入れています。

こういったカード利用の還元金は、校友会の母校支援のひとつとなっています。校友会が行う母校支援は奨学金支援の母校支援の割合が一番大きくなってしまっていて、あとは体育各部に対する特別強化補助費支援があります。やはりスポーツでの活躍状況で校友の盛り上がりは全く変わってきますので支援を行うわけです。また、校友会が実施する支援講座、いわゆる寄附講座に類する支援や、東京の中野に大規模な国際学生寮を建設しまして中野国際コミュニティプラザとありますが、ここへの支援として、3億円を大学に寄付しました。この学生寮の収容人数は872名で、地方学生と外国人学生が2名ずつの合計4名がひと部屋に住み、共同生活をして異文化交流をするコンセプトになっています。校友会は、地方学生の支援に力を入れていますのでこの学生寮には大変期待しております。

8. 奨学金について

少し本学の奨学金のお話をします。学内奨学金と日本学生支援機構、地方公共団体、民間団体と大まかに4種類がありますが、学内奨学金は全て返還義務がない奨学金で構成されております。金額は10万円から100万円、校友会で支援しているのは、年間の給付額が40万円の奨学金です。国立大学と本学の授業料の差額が大体40万円ぐらいなので、それを埋めるというのが主旨で

- ・ 採用者数 : 延べ約22,000件
- ・ 交付総額 : 約150億円
- ・ 奨学金種類 : 約250種類以上

全国の国公立・私立大学の中でトップレベル



WASEDA University

す。奨学金の充実は、全国でもトップレベルだと自負しています。その中で、新たに「めざせ！都の西北奨学金」を始めました。この奨学金の特徴は、入学前予約採用奨学金であることです。出願期間は10月半ばから11月末日までと、センター試験が終わってから10日間ぐらいの2回にわけて募集時期を設けています。受験前に申請しておいて、受験前あるいは合格発表前に結果が分かるので、合格して入学手続きをしたら、入学後40万円を給付してあげますという奨学金です。これによって、経済的な不安が念頭にあって、東京まで来て受験をするのを当初からあきらめている受験生の負担を軽くしようという狙いがありまして、年に200人ぐらいが給付を受けています。

この取り組みが数年経過すると、学年に800人ぐらいの「めざせ！都の西北奨学金」の受給者の学生がいることとなります。現在、早稲田カードの還元金や大学への寄付により、この予算を全て校友会が、ほぼ経常費用をかけないで支援している状態です。

9. 校友会費について

なぜ本学の校友会がこれほど積極的に母校支援できるのかということですが、校友会費4年次納入制度という制度があるからです。学費は春学期と秋学期、2段階で分けて納めていただいています。4年生の秋学期の段階で、10年分の校友会費を学費とともに大学が代理徴収する制度です。この制度の導入により校友会の予算が潤沢になり母校支援に注力できることになりました。他大学の校友会で導入している制度は、代理徴収はしていても終身会員であるところが多いですが、終身会員の場合は、一時的に収入は増えますが、どうしても先細りになるデメリットがありますので本学ではこの制度を導入しています。ただ、10年間経過すると、11年目からは自分の意志で払ってくださいということになります。これが、影響するのは2016年4月からになります。毎年卒業生がいる限り、現状より会費収入が下がるわけではないのですが、会費収入が伸び

れば伸びるほど母校支援ができますので、卒業11年目以降も校友会費を払ってもらえるような施策を行なっていきたいと考えています。校友会は創設期以来から母校支援が目的になっているので、この会費収入を増やすことは大変大きなことだと考えています。

10. 早稲田学報について

校友会で発行している「早稲田学報」は、会報誌のグレードとしては、多分他大校友会の追随を許さないレベルにいるのではないかと自負をしております。オールカラーで年6回発行しています。重要なのが奥付、裏に発行年がありますが、実は1897年から連綿と続いておりまして、今回で1208号になります。「早稲田学報」に自分の名前が載る可能性は、特集で登場していただく以外に、「稲門だより」というコーナーがあります。ここに全国各地の登録稲門会が投稿し、掲載されるということになっていまして、書き方はさまざまですが、参加者の名前がずらりと掲載するところもあって、この歴史ある「早稲田学報」に自分の名前が載るということで登録稲門会を目指すような活動もあります。また、校友会ニュースとして、代議員会での議事内容や、参加者などを記載しています。

「早稲田学報」は重要なコミュニケーションツールなのでこれからも誌面の充実に力を入れていきたいと考えています。

11. おわりに

同窓会活動はいろんな大学の業務の中で、対象が卒業生なので、絶対に大学間で競合しない分野です。大学間でどんどん情報交換してよりよい同窓会活動を育てるべきです。様々な大学の校友会が多様な取り組みをされて、大学の校友会は母校支援するのが当たり前なのだという風潮になればいいなと思っています。私立大学は建学の理念を持って、発展を目指している同士なので、校友会活動はぜひ志を一つにして、みんなで校友を盛り立てていきたいなと考えております。御清聴ありがとうございました。